

# 文 部 時 報

第 八 百 三 十 二 號

靈性的日本の創建 鈴木大拙 (龍谷大學教授).....	一
地理の指導について 松尾俊郎 (文部省圖書監修官).....	六
公民科について 勝田守一 (文部省圖書監修官).....	九
國家的教育研究調査機構 城戸幡太郎 (教育研修所長).....	一三
——地方教育研究所設置の必要——	
米國教員組合同盟 文部省文書課調査掛.....	一六
教育論調 文部省文書課調査掛.....	一九
文部 日誌.....	表紙第二面
食糧危機突破對策について等通牒.....	一九
六、七月法令 告示事項.....	三二

文 部 省

昭和二十一年九月十日

## 靈性的日本の創建

鈴木大拙

ホツタム元首受諾後の日本の民主主義は外から加へられたもので、内から自づと發生したものではないのである。それ故、聯合軍の占領下で、民主主義を教へられても、明治以來養はれて来た佻佻性の心理態は、いそいと豹變するわけに行かない。特に下級學校の先生は未だ嘗て自ら進んで思索し計劃したことがない人々である。上層から来る指圖(さしず)をそのままに忠實に傳達すれば、その任務は果せるのである。未だ嘗て民主主義なるものにつきて考へたこともない、寧ろ考へさせられたことばないのである。

これに加へて、日本人の多くは面従腹背と云ふ悪い習癖を持つて居る。これも封建的、軍閥的、官僚的壓迫下で永く生活して来た國民の何れもが持つところのものである。長いものには巻かれよと云ふ習癖がいつまでも續いて居ると、表にハイ／＼と云つて、裏ではそれをくぐる方法のみを考へることになる。人間は元來自由を欲し自主的なものであるが、壓迫の手が餘り長く餘り強く加はつて來ると、人を欺き、ひいて己を欺すやうな心理態が自然に出來るのである。そこへ太平洋の彼岸からの民主主義を移植しようとするのであるから、一朝一夕に芽を生ずることば有り得ない。日本到るところの學校で随分辻褄の合はない教室内の喜劇と悲劇とが並び行は

れて居るに相違ない。どうしてこれを矯正するか。

これは昔から日本人の誰もが殆んど常習的に行つて居ることであるが、何かお上から人が見に来るとか云ふことがあると、大騒ぎして、何もかも綺麗にして見せると云ふことがある。普通にお客に不快の感を與へないと云ふことなら、それも大に結構であらう。が、實際の状況を視察したいと云ふことなら、ありのままを見せるのが最も然るべき次第でなくてはならぬ。殊に陛下などの御出ましのときは實情の御視察なのであるから、餘所から來るお客の見物と違ふのである。陛下は御自分の家の中をこらんなるのである。なにも餘所行き(よそぎ)の凡てを陛下にお見せ申す必要は少しもない。これこそ上下の躰陸(たてり)が可能になるのである。それをしないで、遽かに上を下へと騒いで下檢分なるものを舉行するのは、他を欺き兼ねて自らを欺くものであらう。これは封建時代から盛んにわが國人の間に行はれた悪習である。これも自主的精神の缺けて居るところから出るものと斷すべきであらう。

自主的に行動する國民は所謂餘所行き(よそぎ)行儀を習ふべきでない。固より一般の禮讓は必要である。これは敬養ある人間の何れもがやるべき當然の社會的訓練である。併し芝居(しばい)を行ふ必要はいらぬので

ある。役人の前を藩ふことは、いつも他から壓迫を受け屈従を強められた國民のする行動である。又役人がその地位に附帯する權力を個人的利益のために亂用することも、自主的國民の敢て爲さざるところであらう。何れにしてもわが國人が何かと云ふと、その場々で見えを飾らうとするのは、他に依存してそのものの歡心を買はんとする卑屈な心掛から起ることは疑ないのである。このやうな彼の氣分と卑屈心とは、どうしたら矯正せられるか、どうしたら根こそぎ排除せられるであらうか。

まづ第一に吾等の心得ておくべき事は、舊日本は亡びたと云ふことである。今までの日本を支持して来た思想體系は最早役に立たないのである。今までは軍國主義、封建主義で押し通されて来た。日本は平和を希求して来た、好戰國ではないと云ふことになつて居るが、それは虚説である。どこの國でも、我國こそは好戰國だと云ふものはない、誰でも口に出せば平和と云はぬものはない、而して何れも實際に平和を愛好するのであるが、好戰のデーモンは何時しか頭を擡げてくる、それで平和の善神も後退をよぎなくせられるのである。ところが今度の大戦争は確かに従來のイデオロギーを一轉化させた。舊イデオロギーに囚はれて居た日本とドイツとは、舊來の方式で戦争を始めた。世界の氣運は既に已にそのやうな方式を好まぬことになつて居たのである。それを看取するだけの力をもつて居た政治家が日本に居なかつた。軍閥に押されたと云ふのは、つまり世界の思想が次第にどの方向に移りつゝあつたかと云ふことを見抜くだけの頭が日本には乏しかつたと云ふことになるのである。原子爆

等日本人はすべて深き宗教的信念の體得者とならなければならぬのである。

靈性的日本の建設がこれからの仕事であると自分は信じて疑はないのである。これは實際に云ふと日本だけの仕事ではないので、今後は世界を擧げてこれが完遂に全力を盡くすべきなのである。政治がどうの、經濟がどうのと、いくら叫びまはつても、何れもが靈性的基礎の上に立つて居ないと、同じ事を繰り返すにすぎないのである。即ち戦争にあけて戦争に暮れるより外ないのである。而して畢竟は人類全部の滅滅とならねば止まないことにならう。原子爆彈の發明は或はこの悲惨な状態から吾等を救ふことになるかも知れないが、靈性的に築き上げられて居ない限り、破壊は何處からか面を上げるに相違ない。これは火を賭るより明かな次第である。但し日本は敗戦と無條件降服とですべての軍事施設を根本から破壊せられたので今後は眞裸の状態に置かれる。如何にも情ないと云へば、さうでもあらうが、また他の觀點からすると、願つたり叶つたりである。それは何故かと云ふに、人間はもとゞ眞裸になつたときが最も強いきなのである。何かあるとそれを恃んで一仕事しようなどと考へもしようが、何もないと全くの受働状態である。而してここで始めて正義なら正義、公平なら公平、博愛なら博愛を、無條件に又何等の下心なしに、唱へ出すことが出来る。自分はこれを眞眞の風味と云ふ。日本は他動的ではあるが、今日圖らずも此状態に置かれた。それで吾等は恵まれた此機會を大に利用して、戦争慾なるものを絶對に抛棄したのである。さうしてこのやうにして浮び出た餘剩力を科學の研究、技術の洗練、文藝の向上、生活の美化、思想

彈の發明なども畢竟は世界全體に動いて居る思想の動きの一つの表現だと見るべきであらう。どうしても今日は舊日本に戀戀たるべき時代ではないのである。

『敗戦の恥辱は何としても暫らくは耐へて居なければならぬ、聯合軍の駐屯して居る間は臥薪嘗膽だ、それから復讐戦をいつかやるべきだ』などと云ふ考は絶對に持つてはならぬ。それは『男性的ではない、いかにも卑屈だ、敗戦に腹が立たなくなつたのか』と罵られることもあらう。が、それは世界のイデオロゲトが今何れの方向に動いて居るかを知らない田舎武士の空威張りとしか考へられないのである。世界の形勢はもはや戦争前のもではない。權力政治は過去のものである。これを夢見て居るものもまだ、相應の數に上ることであらう。が、彼等はやがて舞臺から蹴落されるに極つて居る。それに早くなればなるほど、世界は一人間は恒常の平和を將來することが出来るのである。

ここに日本の新たな使命がある。日本は戦争の結果として、一切の武装を解くことになつた。これは外から加へられたものではあるが、これを好機會として、吾等は自主的新日本の創建に努め、自主的に自發的に此新しき形勢に順應するのである。而して全世界の非武装と云ふ世界新情勢を將來すやうに努力するのである。これを靈性的日本の創建と云ふ。

これはどうしても各自の宗教的體験に待たなくてはならぬ。單なる論理的勸誘で仕上げられる行事ではないのである。又道德的政治的工作だけで成績を擧げ得るものではないのである。一時の花火線香や御祭り騒ぎの氣分で取りかかるべき事業ではないのである。吾ら。と。こ。ろ。で。日。本。人。は。今。直。ぐ。に。靈。性。的。國。家。の。建。設。に。邁。進。す。べ。き。す。べ。て。の。準。備。を。整。へ。て。居。る。か。と。云。ふ。に。な。か。／＼。さ。う。で。は。な。い。の。で。あ。る。甚。だ。心。許。な。い。と。思。は。れ。る。諸。條。件。さ。へ。も。あ。る。の。で。あ。る。こ。の。ま。ま。の。日。本。人。で。は。ま。だ。／＼。世。界。の。他。の。諸。國。に。比。し。て。遅。れ。て。居。る。も。の。を。持。つ。て。居。る。そ。れ。で。お。い。そ。れ。と。靈。性。的。日。本。の。創。造。を。行。う。わ。け。に。は。行。か。な。い。の。で。あ。る。そ。れ。ど。こ。ろ。で。は。な。く、實。に。前。途。遠。く。と。言。ふ。べ。き。も。の。が。あ。る。の。で。あ。る。そ。れ。な。ら。何。と。し。て。靈。性。的。日。本。の。建。設。な。ど、如何にも夢幻に似たもの仕事に取懸らんとするのか。それにばかう云ふ理由がある。さきにも云つたやうに、國家的、社會的、文化的施設のすべては、靈性的の上に打ち建てられなくてはならぬのである。さうでないと、如何にも表面上美しく見えても、その基礎工事の脆弱なるがために、將來の荒風のために吹き飛ばされないと限らぬのである。それ故に、一面各種の平和事業を起して、國家の存立を堅め、社會の繁榮と民衆生活の向上を計ると同時に、それらは何れも靈性的直覺と聯絡することを忘れないやうにしなければならぬ。これはたゞ無闇に宗教熱をめぼるとか形而上學的思索に耽るとか云ふことではないのである。經濟の基礎を固めつつ、それと同時にそれに靈性的永遠性と強固性とを持たすやうにすればよいのである。靈性的

日本なるものが經濟や工業や科學や道徳などと云ふものの外にあるのでなく、それと並行して實現され得るものである。否、それと同時に實現されるやうにとめなければならぬのである。それ故に、靈性的日本は日常生活の外に在るものでなくて、實にその中に自ら宿つて居るものなのである。たゞそれを自覺さへすればよいのである。故に問題は自覺を如何にして可能ならしめるかと云ふところにあるのである。

消極的には、現下の「正確に云へば、今までの考へ方を一轉させることである。それはまづ第一に國家觀を改めるにある。殊に平田篤胤流の神道觀の上に日本國家をおくことである。これほど危険な思想はなかつたのに、よく今までそれが支持せられて来た。無條件降服後、聯合軍によりて國家神道が國家の保護を受けられないことになつたが、聯合軍は尙これを一種の宗教的信仰だと認めて居るやうである。宗教的信仰の一つの形態だと見ておけば、民衆の歸依如何によつて自ら盛衰し行くものとならう。それで國家神道も自ら國家と結び付いて往時の軍閥國家を思想的に支持するやうなことはなからう。その危険性はこれで除かれると云ふことになるが、それでも日本の教育者の間にはまだその誤謬に氣付かぬものあらんも知れぬ。それはなぜかと云ふに、日本人の大部分は自主的に物事を考へることをしない。他の指導が示唆か乃至命令によりてのみ動くのである。今までは政府當局の一片の命令でその考を定めその行動を規制して行つたものが、突如、藪から棒のやうに、『その考へ方を止めよ』と、他から制せられても直ちに百八十度の轉回は出来ぬであらう。人間の心理はさう軽く入れ替へるべきものでないから

界的皇道の雄大なる規模』(重松信弘、國學思想、頁二八〇)と云ふに至りては實に抱腹絶倒である。日本は實に此の如き思想に由りて指導せられて来たのである。『萬國の道』である神道がその通りに世界性を有つたものなら冤に角、それは日本を『萬國の祖なり』となすところの神道ではないか。これは思上つた考へ方と云ふより外ない。如何なる歴史的、論理的根據によつてそのやうなことが言はれるのかしらん。古事記や日本書紀のどこに世界性をもつたものがあるか。原始性の民族心理を今日の吾等のもつ考へ方で作り直すことは、危険至極である。ましてそれを以て國家觀の基礎材料とするに至りては、狂氣の沙汰であると云ふより外なからう。なぜかと云ふに、自分の頭の上に出来たこぶの故に、自分は世界中で最も値打あるものである、従つて世界はそのこぶに向つて一齊に敬禮を行ふべきであると云ふと同じことだからである。個々の人間はその特徴の故に個人たるを失はないのであるが、それが直にその個人をして他の多くの特徴をもつた個人より一層の値打をもつたものと云ふことにはならぬのである。日本と云ふ一國家は他の多くの國家群に對して殊に他の尊敬を強要すべきものを持たないのである。他の國家にもそれ／＼の特性がある、それで一國家は他より區別せられるのである。この特性はそれ／＼に尊敬すべきものである。一つが特に他るものに優れて居て、他のものは悉くそれに向つて『萬國の祖』であると云つて禮拜すべきものは何處にもないのである。ましてこの禮拜を此方から強請し、それを受け入れない場合には強力を以てこれに臨むなど云ふことは固より許すべからざるることなのである。さうして日本の國家神道はこのやうな態度で『萬國』に望み、『萬國』がそ

である。民主主義がどうのかうのと云はれても、なか／＼に納得は不可能である。政治的に民主主義は何であつても、思想的にはそれは自主的に考へると云ふことに外ならぬ。さうして日本人は此自主的思想に最も不得手であるやうに育てられて来たのである。民主主義と他律的行動とは相反するのであるから、後者に馴れて来たものが、さあ『右向け右』と云はれても途方に暮れるのである。身體の位置だけは命令通りになつて居ても、自主的に考へることは他の言かけにのみ随ふと云ふことでないから、何をどう考へてよいかわいなないのである。國家神道を受け入れたとき、自主的に考へて、それが本當だと結論して取り入れたのでないから、それを捨てると、迷子とならざるを得ない。

試みに平田流の國家神道觀を一瞥して見るとよい。それは實に左の如き亂暴なものである。國學者はそれを眞向にかざして軍閥の後押しをしたのである。曰はく

日本は萬國の祖國なり  
わが皇室は萬國の主なり  
神道は萬國の道なり

これは山田孝雄氏の平田篤胤(頁二七四)に述べてある國家神道の三綱領である。如何にも驚くべき思想ではないか。世界を知らぬ、島國根性の、國學者でない、このやうなことを放言するわけに行かない。トマス・マンはドイツ人のチチスの國家觀を『驕慢な地方氣質』arrogant Provincialism から出たと云ふが、日本の國學者の國家觀も亦かく云ふことが出来る。自分はこれを『偏狹で傲岸で無學な島國根性』から發生したと云ふのである。然るにそれを『世

れなきかぬときに暴力を以て是非とも聞かしめんとするのである。

このやうな神道がどうして『萬國の道』と考へられるであらうか。『御後威』ばかりを無上の世界的價值をもつたものとして、それで萬國を『一字』の下に歸服せしめんとする帝國主義、侵略主義、武力萬能主義が、どうして『萬國の道』と考へられるのであらうか。

このやうな平田流の神道的國家觀には靈性的なものば微塵も認められぬのである。

今精しく説述の餘裕がないので、靈性的日本を打建てるには必要な思想的過程をざつと並べて見ると左の如きものを數へ得る。

- 「自主的に考へることに習ふ。
- 「自主的とは個人の道徳的人格を尊重することである。
- 「道徳的人格とは各自の持つ自由性である。
- 「自由は各人の道徳的に平等であることを意味する。
- 「道徳的自由、道徳的平等は人間に固有の性徳である。
- 「この性徳の根本に徹底せんことを要する。たゞ性徳のところ止まつて居ては、道徳的社會又は國家が出来ても、それは靈性的ではない。
- 「靈性的の本體は我と他と共に救はれんとする大悲願である。
- 「この大悲願に徹するとき、日本的なるものはその日本のためにと失はずに、直ちに世界性を帯びて来る。これが靈性的日本である。
- 「靈性的日本は固より健全な經濟機構の上に立たなくてはならぬが、この機構そのものをして本當に健全に發展せしむるのは靈性的自覺に外ならぬ。

お知らせ

今般文部時報は昭和二十一年一月終戦再建號として更生出版することになり、定価は一部貳圓(特別行爲税を含む)に変更されました。御諒承願ひます。別に送料を申受けました。

一 文部時報の形式及内容等總てが再建號を把持し、民主主義的新日本之建設建設報道の使命に邁進致します。

一 文部時報の形式は毎號約三十二頁、9ホ6號8ホ及6ホ大の活字で二段組、三段組四段組等各種の組み方を用ひ又用語、文句すべて能率化し毎頁充實せる内容を載せる

一 文部時報の内容は別掲文部時報刊行計畫摘要の通りです。特に登載事項中文部法令告示等は簡単に事項目を指示し官報参照に便ならしめ、更に省内各局發送の重要な選牒や解説、聯合軍總司令部の教育關係指示等に紙面を充てる

一 講話、談話、研究、解説等は時局稍適切緊要なるものを轉める。

文部時報第八百三十一號(昭和二十一年八月十日刊行)目次續要

新日本の國語のために……金田一早大國大教授

教職員の適格審査について……相良文部事務官

各政黨の教育文化政策

文部日誌 通牒 法令 告示  
彙報 教育關係衆議院議員調

編輯後記

終戦後滿一年、道義頹廢の甚しい今日、「宗教的自覺による隣人愛・無我の思想を全國に普及浸潤させ、教育の根本に宗教的情操を導入し、「戦争は罪惡なり。」との理念に基く世界恒久平和運動を日本より提唱する方途を確立しなければならぬ。」といふ宗教的情操教育に關する決議案がさる八月八日衆議院本會議で上程採擇された。

本號の鈴木貞太郎博士の「靈性日本の創建」はこの決議案の線に沿ふところのもの、それは又藤田監修官の「公民科について」の論文と共に恒久平和的戦争抛棄の日本・民主主義的文化日本建設の爲、科學・技術の振興と併せて最も重要な道義振興の教育に渾身の努力を傾倒しなければならぬ讀者の教育實施の上の心構への養糧となることを希望して掲載した。

六月二十九日附を以て聯合國軍最高司令部より授業再開の指令があつた「地理科について」は松尾監修官の執筆を煩はした。又米國教員組合同盟の調査は我が教育界現下の同問題の参考にもならう。新聞雑誌の論調は國內各方面の教育關係事項に對する聲の要點録音に役立つ。城戸教育研究所長の提案、國家教育研究調査機構の一環として地方教育研究所の設置案は教育の向上刷新を志す者の實現したい立案の一であらう。

定價表

一部	金貳圓
六ヶ月	金拾貳圓
一ケ年	金貳拾四圓

郵税は別に戴きます

●臨時増大號發行の節は別に代金申受け  
●御注文は總て前金に願ひます前金切れの場合は送本いたしません

廣告料は二分ノ一頁九拾圓以下、四分ノ一頁六拾圓以下とす。掲載頁數は壹部毎右に拾五頁を越ゆることを得ず

昭和二十一年九月七日印刷納本(第八三) 行(二號)  
昭和二十一年九月十日發

發行所

東京都文京區銀座西七丁目一番地  
帝國地方行政學會  
會員番號A-110015  
電話銀座六六〇、六六一、六六二、六六三番  
振替附金口座東京 東十三三番  
東京都田原區藤原町一十九

發行所  
東京都文京區銀座西七丁目一番地  
帝國地方行政學會  
會員番號A-110015  
電話銀座六六〇、六六一、六六二、六六三番  
振替附金口座東京 東十三三番  
東京都田原區藤原町一十九

配給元  
日本出版配給株式會社